

氏 名 吉松 梓
学位の種類 博士（コーチング学）
学位記番号 博甲第 10414 号
学位授与年月 令和 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科 人間総合科学研究科
学位論文題目 長期冒険キャンプが青年期前期の身体性に及ぼす影響

主 査 筑波大学教授 博士（コーチング学） 會田 宏
副 査 筑波大学教授 坂本昭裕
副 査 筑波大学准教授 博士（コーチング学） 秋山 央
副 査 明治大学講師 博士（教育学） 土方 圭

論文の内容の要旨

吉松梓氏の博士學位論文は、長期冒険キャンプを用いて青年期前期の青少年の身体性に及ぼす影響について明らかにしたものである。その内容の要旨は以下のとおりである。

（目的）

著者は、近年の ICT 化の急加速による社会構造の変化によって、日常における身体性を伴った体験不足が深刻化していると述べ、特に青年期前期は、心身の発達の特徴から身体性に混乱を生じやすく、その問題が不登校などの行動化や心身症などの身体化の契機となっていることを指摘している。そして、このような青年期前期の青少年の支援策として長期の冒険キャンプの有効性を論じ、国内外の先行研究を概観することによって身体性への効果検証、また、そのプロセスや要因を検証した研究は充分に行われていないことを明らかにしている。そこで、本論文で著者は、青年期前期の身体性に着目し、長期冒険キャンプによる影響を明らかにするために、まず青年期前期のボディイメージの構造把握とボディイメージに及ぼす効果を検証し、次に長期冒険キャンプにおける青年期前期の身体性変化のプロセスと要因を検討し、さらに身体性に課題を抱える青年期前期の参加者の事例から長期冒険キャンプの意味を例証することを目的としている。

(方法及び結果)

著者は、本論文において、以下の3つの研究課題を立案し、それぞれの課題を解決する4つの研究を行っている。

研究課題1では、著者は、青年期前期におけるボディイメージの構造を把握するために、ボディイメージの知覚、評価、関心の3つの側面の尺度作成を行った(研究1)。その結果、青年期前期用身体感覚尺度(ボディイメージの知覚)、身体的自己記述尺度(ボディイメージの評価)、さらに社会的体格不安尺度(ボディイメージへの関心)を作成し青年期前期に適用されることを確認している。

次に、著者は、研究1で作成した3尺度を用いて、青年期前期のボディイメージへの長期冒険キャンプの効果を検証している(研究2)。長期冒険キャンプの参加者と非参加者のキャンプ前後の得点を比較した結果、ボディイメージの知覚と評価についてはキャンプ参加者のみ得点が有意に向上していた。一方、ボディイメージへの関心については有意差が認められなかった。以上の結果から、長期冒険キャンプは、体型や容姿などのボディイメージへの関心には直接的に影響を及ぼさないものの、ボディイメージの知覚と、ボディイメージの評価を向上・改善できることを明らかにしている。

研究課題2では、著者は、長期冒険キャンプにおける青年期前期の身体性変化のプロセスと要因を検討している(研究3)。身体性に課題を抱えている青年期前期の臨床群8名を対象に参与観察を行い、得られた質的データをM-GTAを用いて分析した。その結果、まず身体性変化のプロセスとして身体との関係性を取り戻すために、1) 身体への違和感・ストレスの身体化の段階。2) 身体の限界にせまる体験をすることにより、身体に気づき、体験を通して自己に向き合う段階。3) 身体に自信を持つ段階があることを示している。特に著者は、身体の限界にせまる体験をすることは長期冒険キャンプの特徴的な体験であり、「主体としての身体」を取り戻し、「客体としての身体」を回復することを明らかにしている。次に、身体性変化に影響を及ぼした要因として、1) 身体を介したスタッフの受容的な関わり、2) 身体を通じた実存的次元での仲間関係、3) 自然の中での身体感覚に基づいた感情体験の3つのカテゴリーを含む「他者および自然との身体を介した関係性」があり、これらが身体性の回復に寄与すると推察している。

研究課題3では、著者は、生育歴や身体性の課題などの個別事例の背景に沿って、その個人にとって長期冒険キャンプがどのような意味を持ったのか例証している(研究4)。身体性の変化が、生じたと考えられる2事例を対象に検討を行っている。その結果、事例1は、身体症状が問題のメッセージとして他者に受け止められ、冒険的活動の中で疲れや痛みを実感し、心身のつながりに気づいていくことで、「主体としての身体」の感覚が回復したことを推察している。事例2は、青年期前期の心身発達のアンバランスを抱えていたが、冒険的活動において課題を克服することで自我の成長が促され、「私にとっての対他身体」への期待を取り入れることによって「客体としての身体」に自信が持てるように変化したと考察している。また、自らの性を受け入れるなど青年期前期のアイデンティティへの取り組みが体験されていたことを考察している。著者は、このように長期冒険キャンプにおける青年期前期の身体性は、「主体としての身体」、「客体としての身体」、「私にとっての対他身体」、そして「他者の身体」、および潜在的には「対他物身体」としての自然が、互いに錯綜しながら回復したのではないかと推察している。

(結論)

著者は、長期冒険キャンプが青年期前期の身体性に及ぼす影響として、1) ボディイメージの知覚と評価を肯定的に変化させること。2) 変化のプロセスとして、身体の限界にせまる体験をすることによって、身体に気づき、自己に向き合い、身体に自信を持つプロセスがあり、その要因として、3) スタッフによる身体のケア、仲間を支えて命の重みを実感すること、互いの身体で深く関わること及び自然の中での身体感覚を実感することの重要性を示唆している。また、4) 身体性に課題を抱える2事例の

検討から、長期冒険キャンプの体験は、青年期前期の身体性の混乱から回復し、アイデンティティの課題へ取り組む機会としての意味を持ち得ることを明らかにしている。最後に著者は、実践現場への示唆として、青年期前期の身体性とボディイメージを理解すること、参加者には適切な冒険プログラムの課題を設定すること、十分に自然環境を活用すること、長期冒険キャンプにおける指導者のカウンセリング的な態度、事例検討などを通じた長期冒険キャンプの体験の意味について検討することを指摘している。

審査の結果の要旨

(批評)

本博士論文は、今日の青少年の身体性を伴う体験不足によって生じている不登校などの行動化や心身症などの問題に関心を向け、長期冒険キャンプが青年期前期の身体性に及ぼす影響について解明を試みた研究である。これまでに長期冒険キャンプの効果について身体性の観点から取り組んだ研究は行われておらず、本邦初であり独自性の高い研究といえる。著者は、長期冒険キャンプの効果として、参加者のボディイメージの知覚と評価を有意に向上させること、またそのプロセスと要因について明らかにしている。これらの知見は、長期冒険キャンプを実践する上で極めて重要な示唆をもたらすものである。さらに身体性に課題を抱える青少年の事例研究から、こうした支援が青年期前期のアイデンティティ形成や混乱した身体性の回復に役立つことを立証している。本研究の成果は、学術的な価値が高く、しかも実践への示唆を多く含むものであり高く評価できる。

令和4年1月24日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。